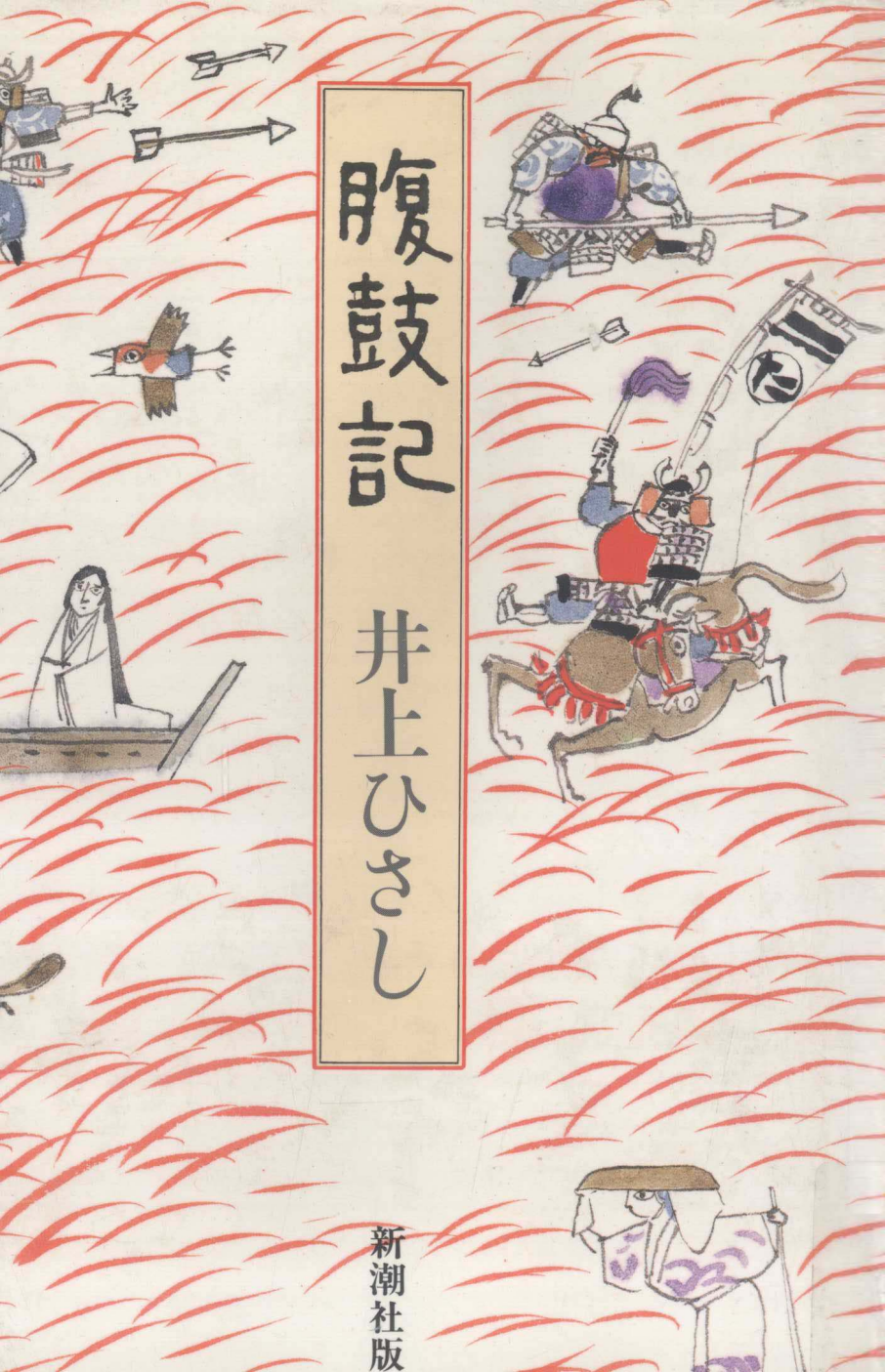


腹鼓記

井上ひさし

新潮社版



腹鼓記

井上ひさし

新潮社

腹鼓記^{ふつこき}



著者 井上ひさし

一九八五年八月二十五日 発行

一九八六年二月五日 九刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一四〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hisashi Inoue Printed in Japan. 1985

ISBN4-10-302318-X C0093

目次

第一章	いたるところで狸の噂	5
第二章	お美代と長吉	62
第三章	二口の茶釜	108
第四章	恋わずらい	148
第五章	讃岐屋島の狸大学	190
第六章	打打発止の大決戦	225
第七章	天保御前化かし合い	254
第八章	赤旗白旗、屋島の合戦	326
第九章	ヒトと狐狸とが三つ巴	394

装帧
安野
光雅

腹^あ

鼓^こ

記^き

第一章 いたるところで狸の噂うわさ

一

天保八年の春、阿波徳島の御城下から小松島の日開野村へ出る朧月夜の道を、二人の男が歩いていた。先に立った男は「染物 小松島大和屋」と入った提灯を真横に差し出している。後の男は、提灯持ちよりは十は若く四十歳前後、なかなか整った顔立ちである。小松島は染物屋の多いところだが、この大和屋茂右衛門は職人を五人もおいていた。小松島でも五本の指に入る、大きな仕事場の持主である。

「ともあれ、吾助よ、今日の話は決して口外してはなりませんよ」

百姓家が途切れて道が松林にさしかかったところで茂右衛門がいった。

「しばらくのあいだ、おまえ吾助の胸に仕舞っておいてくれ。お美代が知ったら、あいつが可哀想だ」

吾助が大きく頷いたので提灯が小さく揺れた。

「口が裂けても洩らしませんとも。それにしても浜島様はひどいお方でございますなあ」

「ああ、わたしにもうすこし勇気があれば掴みかかっていたところだ」

二人はしばらく黙って歩いた。

浜島とは藍方御奉行の浜島庄兵衛のことである。いくら家業が繁昌しているといっても茂右衛

門はただの染物屋のあるじ、そのただのあるじが二十五万七千石の大大名の股肱の臣に擲みかかりたいなどは穩やかではないが、これには無理からぬ訳や次第がある。

藍方御奉行所の役目は、御国名産の藍玉の管理が主である。藍百姓が隠れて藍草をつくったりしていないかどうか、葉藍を「寢床」と称する室藏でねかせて藍玉にするのは御鑑札を持つ藍師の特権だが、その職人どもが他国へ出かけたたりしないか、御奉行所は目を皿にして見張っている。藍玉づくりの秘密が他所に洩れたのでは御国名産が御国名産でなくなってしまうからだ。

「表高は二十五万七千石だが、阿波徳島の蜂須賀家の実高は四十五万石はくだるまい」とは世間でよく囁かれていたことだが、これも藍玉があつてこそである。御殿様だつてこの秘密を守るのに心を砕いておいでだ、とは御城下でもよく耳にすることばだ。江戸へ御出府なされた御殿様は、同じ大広間詰の、諸処方々の大名から、

「藍草の種子を少々わけてもらえぬだろうか」

とお頼まれになる。まさか、いやだ、とはおつしやれない。やむなく御殿様は種子をわけて差し上げるが、それは芽を出さぬように焙った「死んだ種子」である。しばらくして諸処方々の大名は御殿様に、こう申される。

「御好意の種子を国許へつかわして、念を入れて育てさせてみたが、芽も出してくれません。やはり藍草は、御国の、吉野川とかいう大川のそばでないと育たぬものと見えますな」

御殿様でさえこの御苦心、ましてやわれら阿波の者どもは……、御城下で耳にするこの話は、きつとこのようにしめくられるのである。去年の夏は吉野川が出水をおこし、藍草の出来がわるかった。そのせいで藍師のところの職人の手が空いた。三人の職人がこっそりお伊勢参りに出かけたが、大坂に着いたところを斬り殺されてしまった。これも御奉行所の「仕事」だったとい

われている。こつそり出かけるからそういうことになるのだ、きちんと届け出た上で發てばよいではないか、という向きがあれば、その人はおめでたい。そういう届け出が受付けられたことはこれまでに一度としてないからである。

御奉行所の役目はまだあつて、藍百姓から貢租をとり、また藍百姓に売られる肥料の干鰻の動きを見張りもする。さらに大坂の、御家指定の藍玉商人と地元徳島や小松島の藍玉商人との売り買いをよく見ていて、商いが成り立つたところで取引税をとる。地元の藍玉商人の懷中が肥えはじめたら、すかさず御用金を申しつけるのも大事な役目のひとつである。そしてもうひとつ、御奉行所は染物屋にも鋭く目配りしている。染物屋は仕事の性格上、藍玉づくりのこつをなんとか掴んでいる。となると秘密は染物屋からも他国へ流れ出しはしないか。御奉行所では、そう考えているようである。

さて、前日のこと、御奉行所から茂右衛門に呼び出しがかかった。「明朝、浜島庄兵衛のもとへ出頭せよ。悪い話ではない」と小切紙に認めてあつたので、茂右衛門は忠僕の吾助を連れて足取りも軽く家を出た。ところが浜島庄兵衛はいきなりこういつたのだ。

「お美代という娘がおつただろう。去年、小松島の豊国神社へ詣でた折りに、わしはその方の家で休憩したが、そのときおいしくお茶を立ててくれたあの娘のことよ。あれ以来どうもお美代の顔がちらついてならぬ。どうじゃ、わしにしばらくお美代を預かせてはくれぬか。そのかわりといつては何だが、お美代がわしの手許におる間は、その方に御用金を申しつけることはせぬよ」

浜島庄兵衛は、茂右衛門の一人娘お美代を妾奉公にあげろ、というのである。茂右衛門は畳に額を擦りつけて断わった。

「御親切なお心づかいをありがとうございます。がしかしお美代は母親を早くなくし、それから武骨な男親の手だけで育てあげましたふつつかな娘でございます。どのような粗相を働くかと思つと、この茂右衛門、心配で仕事もろくに手につきません」

「お美代はたしか十八になったはずじゃな。わしは五十七。いわばお美代は孫娘のようなもの。たとえお美代がどんな粗相をしでかそうが、いつたいたいだれが腹を立てようか。大人気ない、大人気ない。腹を立てる者などおりはせぬ。それにわしが行儀作法を仕込んでやってもよいぞ。床の作法のほかに行儀作法も教えなければならぬとは、いやはや忙しいことになりそうだわ。ふわっふわっふわっ」

「かさねて御親切なおことばを頂戴いたしましたして、お礼の申し上げようもございません。ただひとつ頭の痛いことは、お美代がいないでは、婿養子の迎えようがないということで。大和屋はつまらぬ店ではございますが、わたくしの代でそれつきりとなつてしまいますと、あの世で先祖に申しわけが立ちませぬ。でございますから……」

「では、二年と期限を区切ろうか。お美代が二十の春に、その方の手に返そう。それまでに婿養子の按配をつけておくがよろうな。そうすれば、わしのところからさがつてすぐに祝言をあげることができるぞ」

「思いがけない御助言、ほんとうにかたじけのうございます。ただ、それではいかにも婿養子になる者が哀れで……」

「たしかな経験を積んだ女を妻に持つことができるというのに、どうしてそう哀れがするのか。それにわしとその方とお美代の三人が口を閉ざしていれば、だれにも既通女とわかるはずがないではないか」

「まったく仰せのとおりでございます。がしかし三人の口に戸は立てても、世間の口に戸を立てることができませんかどうか……」

「いや、あつぱれ」

浜島庄兵衛の、しなびた茄子なすのような顔が笑った。

「子を思うその方の気持、つくづく感じ入った。子を持つ親というものは、なべてその方のようにでなければならぬ。忘れろ、忘れろ。お美代を奉公に、という話は冗談であつた。さて、本日、呼びだしたのはほかでもない。その方がつくつてゐる飛沫模様の浴衣ゆかた地だが、あれははなはだよろしくない」

飛沫模様の浴衣地は、いま、大和屋の名を高からしめてゐる。藍を海に見たてて、そこへ白く波頭が砕け散つてゐるという意匠だが、江戸で評判がよく、とりわけ粋筋のあいだでは引っぱり風ふうだという。現にこの正月、「四月までに五百反」という註文を受けてゐる。註文主は、この阿波にまでその大店おみせ振りが聞えてゐる江戸日本橋の越後屋呉服店である。註文状には「深川八幡の夏祭に、辰巳芸者の綺麗どころが飛沫模様の浴衣を揃そろい着してわつと繰り出すことになりました。必ず期日までに」とあつた。茂右衛門は註文状を仏壇に供え、父親の位牌に、

「こんなことが信じられますか。日本一の呉服店から三年つづけて註文を受けたんですよ。それも年々註文数がふえてきてゐる」

と語りかけた。

「おとつつアンは、それでもこの茂右衛門のことを怒つておいでですか」

茂右衛門の父親は、ほかの染物屋と同じように《阿波の染物屋は、木綿糸をただ藍一色に染めていれば、それでよい。日本一の藍が染め上げるのだ、どんな模様よりもその方がずっと美しい。

だから布地染めには手を出すな。布地染めに手を出すときは平凡な柄模様にせよ。奇抜な模様ものにはけつして手を染めるな」が口癖だった。三年前までは茂右衛門は、父親のこの教えを忠実に守ってきた。たしかに、どんな模様を考えつこうが、つまるところ模様は流行りもの、世間の趣味と合わなくなればおしまいである。売れ残った布地を紐がわりに鴨居に首でぶらさがるより仕方がなくなる。そこへ行くと「藍一色」の糸は流行りすたりがない。パカな売れ方はしないにせよ、ゆつくり捌けば売れ残る心配はない。

ところが三年前の夏、店の前に老いぼれて、乞食同然の巡礼者があらわれ物乞いをはじめたが、そのうちぱったり倒れてしまった。茂右衛門と吾助が離れへ運び込み、お美代がつきつきりで看病した。巡礼者は十日ほどで起き上れるようになったが、それからは毎日、仕事場へやってきてぼんやり職人たちの仕事振りを眺めている。秋風の立ち初めたある朝、巡礼者が茂右衛門にいった。

「白い木綿地一反と、どろどろに溶かした蠟ろうを小鍋にひとつ貸してくださいさうぬか」用意してやると、巡礼者は木綿地をひろげておいて、いきなりその上に蠟を撒いた。

「このまま藍で染めてみてくださいだされ。そうして乾いたところで蠟を落す。変わった柄物ができさるう。そうそう、わしがやったようにして十反ほど染めあげて、江戸の越後屋呉服店に送ってみなさい。こちらの運が開けないでもない。そのとき、この書状を添えられたらよい」

巡礼者は封書を一通出して茂右衛門の前に置き、ふわりと立って外へ出た。そして折から吹いてきた風に追い立てられるように南の方角へ消え去った。封書には「越後屋呉服店 番頭殿」「まだ生きていた東洲斎とうしゅうさいより」と認められていた。糊付けしてあるので中味はわからない。

指示通りにやってみると、見事な飛沫模様が染め上った。そこで茂右衛門はその飛沫模様を型

紙に写し取り、十反染めて、例の封書を添えて江戸へ送った。それが一昨^{さきおとし}昨年^{とし}の十月である。一昨^{さきおとし}年の正月に百反の註文^{しるし}がきた。そして昨年は二百反、今年は五百反と註文数がふえてきている。父親の教えもあり、模様で商売するのは何とはなしに気が咎^{とが}めていたが、しかし五百反とまゝとまれば話はちがつてくる。いまでは「藍糸が半分、模様染めが半分。このやり方で商いをひろげて行くことはできないだろうか」と考えるようになってきている。だが今日はそこへ浜島庄兵衛がぐさりと横槍^{よこやり}を突き入れてきたのだ。

「だいたい江戸と取り引きするのはよろしくない。よろしくないどころか、これはだれが考えてもおかしいぞ。そうではないか。たか^たが五百反の浴衣地じや。江戸送りの費用^{かかり}も出まい」

「送りの費用^{かかり}は向う様持ちなのでございます。ですから大和屋としては引き合います」

「ますますもって奇妙じや。日本橋の越後屋呉服店といえ、このわしも江戸の御屋敷に詰めていたことがあるゆえ知らないではない、『現金掛け値なしの大安売』でその名を轟^{とどろ}かせておる。大安売だぞ、茂右衛門。送る費用^{かかり}を値段にのせれば、大安売どころではない、たいそう高い浴衣地になつてしまはずじや」

「よくは存じませんが、越後屋さんとしては、御自分^{みせ}のお店の品を芸者衆が揃^{そろ}い着すれば、大評判になる、と算盤^{そろばん}をおいていらつしやるのではないでしようか。送りの費用^{かかり}ぐらいで大評判がとれれば、これは安い出費でございましょう」

「算盤^{そろばん}が上下^{かみしも}を着ているように頭が切れる、と評判のこの浜島庄兵衛に、算盤玉の弾き方を講釈しようとは見上げた度胸じや」

ニカワを塗つたように黄色く濁つた浜島庄兵衛の目がきゅつと吊り上つた。

「越後屋と貴様との間になにか裏があると睨^{にら}んだ。まさか藍玉づくりの秘法を越後屋に売つたの

ではあるまいな。浴衣地の註文はそれに対する報酬にちがいない。わしの目に狂いはない。きつとそうじゃ。大和屋茂右衛門、その方の田畑、家屋、家財を没収し、那賀川の河口より十六町沖合にある、中津島へ遠島を申しつける」

ここで切れ者は目尻をさげた。

「とまあそんなことになったらお美代がどんなに悲しむことか。子思いのその方にそのときのお美代の悲しみがわからぬはずはあるまいがのう。桜の花の咲く頃にその方のところへ使いを出そう。答はそのときまでに出世ばよい。じつは御殿様から寮をたまわったのじゃよ。寮の庭を流れる小川のほとりに見事な桜の老樹があつてな、風に散る桜の花びらが小川の水面に降っては流れて行く様は、絵のように美しい。わしはお美代と肩を並べて、その様を見たいと思つておる。なあ、茂右衛門、中津島送りになつてはいかんぞ」

これが浜島庄兵衛の「悪い話ではない」という話の全容である。つまり散々恫喝されての帰り道なのだった。

吾助がよろけて、また提灯が揺れた。主人の足許ばかりを照らしていたので、自分の前に大石のあるのに気づかなかつたらしい。

「たまには自分の足許も照らすがいい。足をくじくぞ」

「なに、吾助の足は頑丈にできておりますから大丈夫で。しかしこのあたり、去年の田浦川の出水の跡がまだ片付いてはいませんな」

田浦川は、吉野川とくらべるとずっと小さな川である。しかし茂右衛門にとっては、吉野川よりはるかにありがたい。染物をさらすのにこの田浦川を使うからだ。田浦川にかかる橋を渡れば、もう日開野村である。

「今度、うちの職人の手の空いたときに、ここの石を片付けさせることにしよう。駄賃を弾むといえ、皆、よろこんで出かけてきてくれるだろう」

「そんな心配よりも、浜島様のお申し出をどうなさるおつもりですか」

吾助は提灯を高く掲げて主人を見た。

「この吾助が、無い智恵しぼって考えましたところでは、できるだけ早くお嬢様とお二人でどこか他国へお逃げになるしかないと思います」

「吾助、わたしはどうやら狂ってしまったようだ」

茂右衛門の目は、阿波人形のそのようにカッと見開かれている。吾助は頷いて、

「狂って当然ですわい」

涙声でいった。

「浜島様のお申し出を、まじめに思案していたら、誰だろうと狂ってしまいます。おお、そうじや。旦那様、いっそ狂ってしまった方が仕合わせと申すもの。この吾助ともに狂ってお供を

……」

「そうではない」

茂右衛門は前方を指さした。

「吾助、田浦橋が三本あるぞ」

「やはり狂ってしまったわれた」

吾助は空いている方の手の甲で涙を拭った。

「田浦橋は昔から一本でございます。これから先もきつと一本でございましょう。どんな酔狂な世の中になったところで、ひとつところに橋は一本がたてまえで……」

吾助はもういちど目を擦った。今度は涙を拭くためではなかった。吾助の目にも田浦橋が三本並んで見えたのである。

田浦橋は幅一間半、長さ五間、低い欄干、そして擬宝珠ぎぼしつきの小さな橋である。岸沿いに上流かみ下流へ小道がのびているせいで、橋の袂たもとは四ツ辻のようになっており、べつに言えば空地然かみとしているが、そこにそっくり同じ橋が三本、平行して架っていた。二人はそと寄って、手をのばして欄干や擬宝珠に触れてみた。手応えはまとも、たしかに木である。叩くと、どれもドンドンと音を返してよこす。擬宝珠を搦なんで揺すってみた。どれもこれもゴトゴトと橋全体で鳴った。提灯を近づけて橋の名前をたしかめた。

「田浦橋 天保六未歲閏七月 田浦、日開野両村染物仲間之ヲ寄進ス」

三本とも、こう彫ってあった。字体も同じなら、彫り口の古び方も同じである。

「これはたしかに夢ではない」

三度、頬を抓つかってから茂右衛門がいった。

「だがな、吾助、今朝、渡ったときにはたしかに一本しかなかった田浦橋が半日のうちに三本にもふえているというのも尋常ではないぞ。尋常でないものが見え、尋常でないものを触っているわたしたちは、……これはよほどしっかりと狂ってしまったにちがいない。この調子では、家に帰っても門が三つあるだろうし、お美代は三人いるだろうし、三つの寝間に三つの布団が敷いてあるだろう。そしておそろしいことに全部が本物なのだよ。後架ごうかへ入れば金隠しが三つ並んでいる。湯殿へ行けば風呂桶が三つ、そっくり同じ湯氣を立てている。お膳の前に坐れば箸はしは六本、帳場で算盤をおこうとすればなんと十八玉、七十八桁の大算盤。……ああ、思うだけでも気が狂いそうだ、いや、吾助、わたしたちはもう本式に狂ってしまったている」